

海部仲廣
生記

繪本輪廻物語

乾



洛東

處士東麓著

安倍仲磨

生死流轉

輪迴物語

洛北

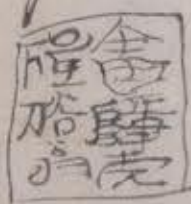
島山保所畫

家の深え世の浅きれや明りあるを
ふと見てもあはれにせむぞあへての人此教
へともありあむと因ひ侍れを斯き傳
たふ言のまをそへり

文政二己卯年睦月

安見雅俗翁

七十九



安部仲磨

天原振離見者春日
在三笠之八萬示出
之月疑



吉備大臣



臣乃通

いんぎふ
初出

もろこ

御音く

源宗隆





隆日

甘草



きーくはたの
いけみち
あつこの村の
うぐいす

安部三子

翰廻物語總目次

卷之一

元正天皇御治世附 天龜嘉瑞の夏
仲曆附 辞世附 好根不義の事

卷之二

史倉老隣の由來附 好根軒意の夏
吉備の八角附 安福山好計の夏
仲曆附 冥を附 吉備の夢中附 田基の道
と惜る古又

卷之三

華清宮地田基附 吉備氏仁心の夏
野馬臺の詩附 安福山再度吉備公を害せしむる夏
隆昌附 女義犯附 吉備大臣飯朝の夏

卷之四

安部保名末歷附 保名信田附 白狐を助くる夏
保名流刑附 信田白狐前生を物語る夏
信田の鬼火附 安部皇子龍宮に致る夏

卷之五

安部皇子ミヤコ京都ミヤコに赴く附菅原通満ミチミツ之ミチミツ子ミチミツ通満ミチミツ術ミチミツを試む附晴明ハルミチ入唐ミチミツ之ミチミツ事ミチミツ

橋ハシ之ミチミツ明ミチミツ計ミチミツ附安部家ミチミツ之ミチミツ事ミチミツ

安部ミチミツ仲磨ミチミツ生死ミチミツ傳ミチミツ輪廻物語卷之一

元正天皇御治世附是龜嘉瑞之事

本朝靈龜ミチミツ嘉老の頃遣唐使の役を蒙りて身ハ外國の土と云々とも名
を後世ミチミツ顯ミチミツしたる安部氏の由來を尋ねる人皇ミチミツ四十四代の帝元正天
皇と云々するハ御寶禪氷高の皇女と申して和銅八乙卯年御即位有
しミチミツ是帝ミチミツ在ミチミツや一時の執政ハ舍人ミチミツ親王ミチミツ萬機の政事を行は
れたる石上ミチミツ右大臣ミチミツ藤原の不比等ミチミツとて四海收ミチミツ穩ミチミツか不ミチミツ夜戸を編さ
百姓ミチミツ腹ミチミツして太平の御代成悦ミチミツむ如是時ミチミツ不ミチミツ出ミチミツりて江州淡井郡ミチミツ
金牙ミチミツ緑毛の龜甲の互ミチミツり云足許ミチミツ多きを奉り許一出るやハ我々共
ハ江洲湖水ミチミツに迎ミチミツて住し漁獵ミチミツを業と仕る者ともハ知今朝ミチミツ
思儀の雲氣湖水ミチミツの上ミチミツに影望ミチミツハ一何事やとて罷り觀見ミチミツハ
府ミチミツ物有て五彩の色をば雲氣ハ其迎ミチミツより影望ミチミツハ

存し取敢て鉤を下し見々知斯る怪異の龜を得ては、
奉るにていと御自所ウツリテの躰躍りて恭しく申上水に執政人親王
我始岸を左右の大匠各々感悦斜るに就中令人親王進み出て宣
やうに臣不肖なりと雖旧記を推て考へ見るにうらなひ琵琶湖より
龜の出たる事いよあり吉瑞とこそ存む外未だ龜は甲壳三
種の長は骨を外はし肉を内はし午足有尾時不随て六蔵
牙緑毛數千散を懸て如此とぞ承りる且往古漢土伏羲の代に尿
阿より大龜阿より來て八卦を負ふられ天地定位の先天の易イキ
して則阿國と名づく後周の文王後天の易を考え其子周公且六
十四卦を阿よりいひ終ひたり天下の易一盤全きを得たり其他龜
其瑞の阿し事古今其例枚舉をいふに在り水に天皇女帝あて在せど
も天性聖德を備一賜ふを以て斯る奇瑞の顯は水たるめていんと
爵を傾けて万歳を祝ふ奉るに左右の大匠に申ふ及むに列座の

百官皆一統の賀瑞をぞ述りまける帝も敷感不斜の餘り年月を
靈龜元年と改元あり彼の湖水の漁客とも小物師とも重く賞し龜
を心願て湖水に放り飯さ水ける其後帝重て勅定ありける朕等
いふも先帝の德を受けて位に即くは時を當り斯る奇瑞の顯は水
しうは漢土の古にありひて万代不易の盤道を起し天下末世の宝
とせんと思ふ然るに我邦神代より易盤の道ありといへども四時の生
来日月の運行其詳あるを年一匝し唐土の金鳥玉兎集と号
けし學々書書の有とこそ聞き及ば是を傳り得て其方を極めたり
盤道の建たぬ處を補はむやと思ふ速に遣唐使を以て借りて
け來れと詔り有けられ左右の大匠の面々一統に佐助に
小難有る敷慮ありまうまうが彼隣万里を隔てたる唐帝珍
の秘書を速に乞ひ得て飯らるる固より容易き事ありぬ各
々默然として言せずし時に令人親王欽て申されける臣等も

実のり承り及びもづかぬ御集くは、
名付けし由其故、^{方圓の器はて大なる時ハ天の圓なる地の方}
なる小はて、今日人家日用の諸具膳梳^ハ盥^ハ血^ハより銘^ハ金^ハ電^ハなるるを
皆方圓の形はて陰陽の体を見せざるのあく内傳と、秘書口傳と
如く金鳥^ハ日月の異名はて畢竟天地の廣大無辺なるを
家内日用微細の事まで如く記しと云るを標記し記せし
唐帝世の珍藏はて就中^ハ玄宗皇帝深く秘藏はし七重
宝藏の中は^ハ綃の天子より外^ハ九卿も拜するの能く承るは
麗^ハ龍^ハ竜^ハ領下^ハにありといふ珠を得るとも此秘書をこひ得て無事子飯
朝せし^ハ當時其人ありとも^ハ買^ハむ^ハ事^ハ果^ハさ^ハば^ハて空しく^ハ納り
来らん^ハ日本^ハ末代の^ハ聖^ハ王^ハも^ハい^ハく^ハなり^ハ其人を撰び其器^ハを
りたる物を以て遣^ハ唐^ハ使^ハ仰^ハせ^ハ出^ハされ^ハ然るべし存し奉ると理を盡し申
す^ハけ^ハし^ハ其時^ハ石^ハ大^ハ臣^ハ藤^ハ原^ハの^ハ不比^ハ等^ハ進^ハみ^ハ出^ハ賜^ハりて^ハ家^ハに^ハ其^ハ人^ハを^ハい^ハ

春日ある三笠山に居住して篇を後^ハ洞^ハの^ハ松^ハに^ハ身^ハを^ハ曳^ハ尾^ハの^ハ龜^ハを^ハ載^ハ
安部仲磨^ハを^ハ智^ハ勇^ハ才^ハ辨^ハ兼^ハ備^ハりて^ハ當^ハ世^ハ希^ハ有^ハの^ハ人^ハ物^ハな^ハり^ハあ^ハる^ハ水
此者を遣^ハされ^ハたり^ハ人^ハの^ハい^ハや^ハの^ハ仕^ハ損^ハじ^ハれ^ハお^ハじ^ハと^ハ茶^ハ一^ハは^ハ茶^ハ間^ハは^ハし^ハ早^ハ
くも^ハ綿^ハ命^ハを^ハ以^ハて^ハ召^ハ出^ハされ^ハける^ハ程^ハ仲^ハ磨^ハ取^ハ物^ハも^ハ取^ハ敢^ハへ^ハむ^ハ参^ハり^ハある^ハ其^ハ人^ハ
と^ハ為^ハり^ハ柔^ハ和^ハ勇^ハ武^ハは^ハて^ハ威^ハ何^ハつ^ハて^ハ極^ハり^ハ上^ハ等^ハ一^ハ位^ハに^ハ同^ハ公^ハあり^ハ形^ハ
勢^ハ此^ハ人^ハ一^ハ度^ハ勅^ハ命^ハを^ハ受^ハけて^ハ渡^ハ唐^ハせ^ハ唐^ハ帝^ハい^ハり^ハ計^ハり^ハの^ハ秘^ハ書^ハなり^ハとも
不^ハ日^ハふ^ハこ^ハひ^ハ得^ハて^ハ飯^ハ朝^ハせん^ハ事^ハ蹟^ハを^ハ回^ハす^ハ一^ハより^ハむ^ハと思^ハひ^ハ人^ハも^ハふ^ハあり^ハ
と^ハぞ^ハ抑^ハく^ハは^ハ仲^ハ磨^ハと^ハや^ハむ^ハもの^ハ人^ハ皇^ハ八^ハ代^ハ元^ハ天^ハ皇^ハの^ハ皇^ハ子^ハ大^ハ兄^ハ弟^ハの^ハ末^ハ
て^ハ一品^ハ詹^ハ樞^ハ詹^ハの^ハ後^ハ胤^ハ位^ハ中^ハ將^ハ大^ハ輔^ハ兵^ハ部^ハ卿^ハ守^ハ朝^ハ臣^ハの^ハ二^ハ男^ハあり^ハ
部^ハ好^ハ根^ハと^ハて^ハ生^ハ得^ハ倭^ハ好^ハなる^ハ故^ハに^ハ父^ハ船^ハ守^ハの^ハ勅^ハ命^ハを^ハ受^ハけ^ハ十^ハ歳^ハの^ハ頃^ハより^ハ流^ハ
浪^ハ困^ハ死^ハの^ハ身^ハと^ハあり^ハて^ハ有^ハ軟^ハ無^ハ軟^ハを^ハ著^ハせ^ハ一^ハ其^ハ名^ハを^ハ知^ハる^ハ人^ハも^ハ無^ハ
げ^ハる^ハ仲^ハ磨^ハは^ハ兄^ハ君^ハと^ハ骨^ハ壤^ハの^ハ相^ハ違^ハひ^ハて^ハ博^ハ識^ハ雄^ハ才^ハ辨^ハ台^ハ水^ハを^ハ流^ハる^ハ如^ハ
世^ハの^ハ人^ハ物^ハ賛^ハせ^ハず^ハと^ハ云^ハ者^ハふ^ハし^ハさ^ハけ^ハ今日^ハ綿^ハ命^ハに^ハ依^ハて^ハ茶^ハ一^ハは^ハ茶^ハ間^ハは^ハし^ハ早^ハ

遣唐使勅命かゝの如く命せられけり公卿殿上人多かる中不
肖の某かゝる大切の厚命を蒙り奉るる家の面目身の榮え
何事かこゝろ如く君の神威を蒙り小可敷く早く入唐仕へ
たとい唐帝珍藏の奇書ありとも身命を代て乞ひ受け解りて
不易の歴道を起し教惠を安じ奉らん事、字を指すは世
さも勇ましく勅策ありて已に階下も下り賜ふに人親王を
奈何か仲唐頼母に死今の一言左に何んと思へとも三千里の外
國をいひたらず不常朝夕を計り返し世が心如何をや宣へ仲
唐頼母と并笑ひて尊命の如く泡沫無常の世の形態もや
某在唐の其間天運拙く仇野の露と消一行く事ありて身
に死し骨は朽ちも三魂六魄天地の間に在る一念中有りて萬世
の一書日本の宝とせむんはる一のみを御心やとく思されずと
欄干にばんとおさる時取ての金丁に真寶面を照されて
又天晴まり理ある故仲唐後漢士に就て終に幽冥の客となり生
本意を遂ぐる事能はずと雖も其備中入唐の時、常りて幾回も其危難
を救ひ終に其書を日本へ渡し還り程歷て其後身安部晴成と現れ
本朝末代の歴代も主賜ふ一言の信を全く貫く英雄にも極
まべく前代未聞の人物なり斯く安部仲唐に我領の命今日思ひ
からむ遣唐使の大任を蒙りし由物清水の妻子を始め一子清月
九とやせし慶雲三年八月十五日の誕生也初名を満丹と申されしが
今年僅か十一歳いやはや志高き子満くされしえ来才智か
世に勝れくる性質あり母君諸共拜手して其後賢を述るべし
三千里の離別とあるこそ喜悅の中にも無量の思ひ珠を
一編の浪子餘情ありて余所に見る見れあはれなり
又仲唐の兄好根と申せし父の勲業を受けしより住み定めぬ
流浪の身のうえ常けり産として有らざるを仲唐痛く思ひ

又天晴まり理ある故仲唐後漢士に就て終に幽冥の客となり生
本意を遂ぐる事能はずと雖も其備中入唐の時、常りて幾回も其危難
を救ひ終に其書を日本へ渡し還り程歷て其後身安部晴成と現れ
本朝末代の歴代も主賜ふ一言の信を全く貫く英雄にも極
まべく前代未聞の人物なり斯く安部仲唐に我領の命今日思ひ
からむ遣唐使の大任を蒙りし由物清水の妻子を始め一子清月
九とやせし慶雲三年八月十五日の誕生也初名を満丹と申されしが
今年僅か十一歳いやはや志高き子満くされしえ来才智か
世に勝れくる性質あり母君諸共拜手して其後賢を述るべし
三千里の離別とあるこそ喜悅の中にも無量の思ひ珠を
一編の浪子餘情ありて余所に見る見れあはれなり
又仲唐の兄好根と申せし父の勲業を受けしより住み定めぬ
流浪の身のうえ常けり産として有らざるを仲唐痛く思ひ

父君の命を憐れ知らぬ兒カホと有月ウツキの去歲の春父君世をば見
し仲磨ナカマ心も思ふや父在世の間とすれなく生ナマは去路キヨに
まかり悪人あり我ワが月ツキ現在骨肉の足あるを難苦ナニクを余アタに
見るやと願ネガて我家一呼オホセ来て詠諫エイケンしつ朝アサに親兄の礼を重
して他事多くは一牽ヒキらせし好根も流石心ココロ漸シビるやあが
仲磨ナカマ親も憐れむ恩恵と先非後悔の気色面オモテに別ワカれ
ぬふありや仲磨ナカマ深く心ココロを喜ば末頼母モトモ思おもひぬ然しかる
今日入唐の重き命を蒙りて家の御月ミツキと思おもへども妻子を
残しつ限傳万里の旅タビに起おこし生死存亡預め期キに正ただしく秋アキふれ猶なほ
事ある心ココロも執しつり行末思おもひ續つづけちばし言こと世も無かりしや
病ヤミりて足根タビに向むかひ般難パンナン有勅命オウボクメイ依よて遠とほく異國イコクふむ
喜恨の眉スズメを向むかへば物思ものおもひし片の風情未練ミレン情弱の振舞
と尊慮の程も愧はづしけれと心ココロに掛る愛惜アイシツの朝アサをいかせん

一子臨月僅か十一我ワがあや何とぞ誰たれが能く教戒ケウケイを加ふる願ねがひ
足君我ワがありありて教一通イツツウすひきぬら縦タテを此身ココロに異邦の土ツチに成
とも恨みいせし忠臣義賊の英雄も我ワを思ふ恩愛オンアイ日頃の惡
兄義根の身ミの存ぞんずるを知らず去年以来の筆字ヒツジを拒こみ解とく
幸さいひと妻子の事こと家の事ことの限かぎり詠諫エイケンしけれ好根領ネ小許諾
し抑おさ我ワが十年の誤あやり父船守の怒を受け遂ついに雲水ウンスイの身みとす
を仲磨ナカマ家イヘを續つづきてより我ワが在所ゾウを探たづねし呼よびて
眞實心マコトココロ往事オウジの咎とがめを以往いの事ことを拒こみ解とく寄よせ時とき
の詠諫エイケン四十二年の氷こを知し満みちが昔むかしのそれありて忠孝チュウコウ
通信義の理ことわりを辨わししも寛平の大恩オホオン早晩イッパン報うたむ時
節しふし無なきと思おもふぬるもあやうしを其その中なかににありて今日只今妻子を
我ワが託たくせしにけし上かみもあや身みの本意ホンイ大海オホウミの一滴イチツツ九牛クウウの一毛イチモウ報うて
やえり有あるや跡あとを殘のこさむと年来トシゴトの忠誠チュウセツ拙つたで、身みを塵芥チンカ

の軽き小比し山より重き君命を早く果して急ぎ、飯朝の目を
屈指かぞ一待をがしと涙あふらふ宜し。仲磨夫婦も満月丸も共
涙あ咽び、叔姪夫婦父子兄弟骨肉の親同胞の信への袂に
あに計り斯ても果して有らば頼て旅装ふとかかりぬ。

安部仲磨入唐附 仲磨辞世の事

順仁天皇二年八月二十日仲磨旅装已に整ひ家事戸端に足し、
松浦より出帆し、連朝日和の好きと思ひ、舟路敢て同平
霜月の下旬唐土に渡り津に着岸せり。維時唐玄宗皇帝開元四年
とぞ聞つける。斯く此首都に訴一けられ隣國の好き黙止ぐく早
速入洛ある一や。安部内小より頼て都に上りぬける。是を名に負ふ
長安の都と思ひ、元より大山を平野とて都とせ、や一地面委
の如く、小島く都城の外に錦展山より流る、処の川をもて外堀の如く
西より廻らせ、お北の方より東南に横に流れて流水出て都の入り

ハ三ノ所皆大門なり。て南大門東大門西大門と号づけ其大門の通りを
大道と名付、通幅世五丈二尺日本五十八間、三市六街縦横お分水て民
戸數十萬皆巷を並一軒を連ね其豊饒ある事限りなく路に墜ち
たるを拾ひ、ば、唐人を鎖すに都の外郭に石壁高く峙ち石を疊
堀とあし、東西南三大門の扉、橋を通りて外堀に渡し、橋を代
不朽の有力盤石を以て、礎とし、橋のより六十余丈幅、大道と均
左右の檻、皆石を以て造り、四方の橋臺に、獅豹虎象の形を彫
て立並一櫓門の額高く目映りて輝き、櫓の四方欄杆朱を以て、
塗する。身月宮小亭ありと思ふ。形勢あり、斯て程ふ
門を入、遠く向を見やり、賜ふ大殿、南向は、仁政殿といへる額
を掛け中央正面に、胡牀に虎皮を敷く。玄宗皇帝の玉座を、
左に、右に、文武の官人巍然として並ぶ。立ち其名も高き張九齡
哥舒観、安福山、楊國忠等を始にして、善惡二つの忠臣佞人常々進んで

見へかけの仲賢頭キタハシを階ハシを上り薄ハシで平伏す。其の間も何れに玄宗皇
帝出座ありて日本勅命の極意を問ひ、世に仲賢薄人ぞ先帝の
勅命全う玉兔集ツキ懇望の由先念ウラナヒあり速に知らせ。帝遂に問
召せし我國第一の秘書卿キミを他国へ遣はし、其の旨を
の好む日本より之を知らせ。評定の上進を沙汰する。其の間、暫く滞留ありて、他国の人を御覧
其間、暫く滞留ありて、他国の人を御覧
の爲に設けし館一處より山海の珍味を以て最可憐ミヤコなり成す。其の
抑、玄宗皇帝と申すは、唐の太宗皇帝より六代の帝より姓を
名に隆基と申す。玄宗皇帝の若君ありて仁を好み、唐を有する諸事、條約
を本にして姚崇ヤウシュウ、宋璟ソウケイを以て大臣と爲す。大聖孔子を
玄宗王と崇め、毎歳春秋と稱す。大なる祭禮を行ふ
政通正セイツテイに在り。下民其徳を懐く事、孩児の父母を慕ふごとく
上下和睦、四海安穩成り。玄宗皇帝の一人、楊玄瑛といふ者の娘

楊大真と申す。誠、絶世の美人にして、綻ハナけり。桃花の露を含む
如く、雨後の秋月雪間より出るに似たり。玄宗皇帝、敬愛ありて、より
深く其色を愛し、おひそめ貴妃の官を賜ひ、楊貴妃と召されて、昼夜御
側を放ナし、あまの傾城傾国の璧ヒキ、宜なる哉。天下大の政事、是を
疾ハヤくして酒宴舞樂のみ長ぜり。楊貴妃の兄楊國忠を丞相と爲し、機
の政事を司り、楊國忠其性暴烈無道、政治の僻事ヒカコト多かり
し。其の臣民を惡め、其威を恐るゝ。玄宗皇帝、河北漁陽の太守
安祿山といふもの、身の材八尺、眉目清美、智勇兼備、實に當世の人傑
なり。帝の行状を見るに、閨門不正、乱の基、唐の代既に長し。其の
思ふにつけ、深く思慮して、都に出来り。帝の侍臣、やも更なる宮中の
女官、金銀絹帛を賄賂して、寵を蒙る。楊貴妃、阿り、其推捧ありて、帝の
眷愛も遠く却て人知れず。楊貴妃と密通して、遂に天位を奪ふ
んとの結構あり。玄宗皇帝、其を知らず。あまの終焉、楊國忠と

同じく重く用ゐられし今何一憚るもあらず天下の政を随
意にすべし今日仲磨退出の後安福山楊國忠を召すべし仲磨
けるに抑今般日本よりや来りし金鳥玉免集の一巻我邦の一秘
書なるを以て他国へ渡し置るを断るいふと思ひしと彼の人
物の飄々然として百官列坐の中をも恥ぢむ心小思ふ程の生憎
さむや迷し面皴尋常の者とも見えざるをいふと断りいふ
せよ蓋する秘書を秘しる卑と其小集を同くせざるは君子の爲する
処とぞ恥ぢみされんも口惜しく又斯むがうに秘藏せしを一漢
も及ぶも彼をんが彼が術中陥るが似て後日悔も及ぶ
彼してよきや利小又彼をむとあり理なりは朕が望みいふとす
思ふる如何と宣ふ安福山進み出で夫我邦天下の中は諸異
邦外國より獨我國をいふる斯る無二の重宝の有故あるを以て
日域の物とせし長く國威の傾く端はて宣ふことしなやせむ

然れども今理不尽に断り昭々とするに宝を惜むと笑ふるのみ礼
を知らざるの誹謗を得ん兎角の先づ彼を留め置て孫す其才
富を試み英才の者の非されば彼の勝る者を以て臨機は察す
断るせん何の憚りありとと決然とてやせけん帝靜顔
するに疾々の詔す諸卿其座を退きて當時小若を以て
詩客文人鴻盧瑩小尋本行や或は詩を賦一文を作り又古今
の事蹟を論して意を盡し書を採り見る小確辨事量一人に
ぶもりあり此由教聞小達しけん帝深く其才を賞する
其終日本へ歸せんを惜みせられ金鳥玉免に追て賜ふ
間心長く我國に滞留はれや明州と云ふは吾邦の地を賜ふ
名も朝衡と改む一子昔勅命して金銀絹帛の數を尽し美せ數年
人を賜ふけるは往昔魏の曹操が関羽長を欽慕の餘り三日小宴
五日小大宴馬の上下の各階に金銀數多賜ふる上賓の礼小御食は

せし斯やと思ふ計り之然水と申仲信忠義廉直の性所也
 兩腕計り心も寝せむ只朝ふ日本空をうめし思ひて
 一巻を乞ひ得ぬうち死をともぬの心も此の事なり



安部仲唐
 交西園
 饒
 生

皇朝も受得て見んものと帝の氣色おどろき、か日も玉座に侍
坐して勅料の日を待たせる斯く其年も暮けぬ間に入五年改
玉の著立歸る間もあゝ夏過秋も七月の二十日頃まで成りけり
時安福山楊國忠の弥成勢さうんはて陰謀密策日々の浮雲
大車成勢せしつづけるも中程切りの心掛りあるに安福仲勝の
所居の砌より玄宗帝の殿裏より目見暮玉座の左右に
ふすその御座邊彼よりさるや我々が及逆の機を推察しを竊り
敵間を透しふに大莫忽ち露顯して千悔痛を嘆とも返りし又
影れする其内より一先縣を亡して福の根を刈るに如くと安福山
楊國忠曹勳司馬懿等を始として兼て一味の信人原計略密に
示し居せ一日勅命を仰りて仲勝を招請し凌雲閣に召つけし高
三千丈の樓上より旨嘉肴杯盤狼藉種々の饗宴意心を端して他更
多き件も見えりし可憐安福仲勝深き奸計の何人かと神

ありぬ身の露知りぬも膝折くつらげ余命を忘る時を移して
樂なる誠也天運命を革むる時博識の智者も其身を知らん
と年暮るるぞし英才も今いつし順逆のれも乱れし益の
能く悲しむ一週も敵つ敵一つ傾けし數も精も醜醜の折しも吹
来る浪尽の酔醒まりする快おも思ひを倒れし一睡さう順七
月下句さるるぞ冷氣を催す時節あるか早黄曾しも成けぬ
い尚も烈しき海風子不回日を覺はし起来ぬ大陽已に西に没して
さしも小陽子高樓の下の闇けぬ燈火あけぬに奈何か
迎を見る小陽子の官人皆退ひて壁上暗く寂莫さう仲勝は
怪しむる聲を隔つて呼ひさるる人も荒波の岸に寄る
聲ありて誰か誰かの有されし樓を下んと四方を見る小何の間
や引くるけん指杯ととも何れさる仲勝知て心付くおれ何れ
安福奸計の陥穴あり安福山楊國忠が深しも工に奸計あるを

仲磨談話は、懐り得る有集等が毒手か延せは命惜むは
らざるも元正帝の勅定もて遠子渡唐は去年す心づきか
もあし君一の不忠身の恥辱今を弔り思ひしる今人親を先見の
一言我亦其時誓ひし如く身は幽霊の客とする骨は外國の土と朽ち
凝り塊りし一屆は長く廿世止りし金鳥王の一事を早
得て日本一渡さでやてをくへくと眼逆づり唇青く憤懣
いひ不堪一ざりしと思す日數三七日水聲をも絶えぬといふ
命の続くべし今日を命終と思ひぬ八月十五日と聞へ
古今獨歩の英雄も流石故郷の暮泰三笠の麓春日野ふ
残し置きくる妻や子に斯る事と知らるる去年の冬
叶秋近岫岫の思ひ不待るらん兄も無のし叶月心苦
思ふら我いうるれ生國の秋津洲を遠く離れ君命を
屍を異國の土に晒す過る修因今生の現果拙りける叶身

やや憂着心の思ひの闇涙おくる月を開け三千里の海上
眼下わたり海士が釣する舟もさ蒼々渺々たる天のふ仰て
遠く詠む水東の方か玲瓏と輝き昇る三五の月盈虧開け
有り轉々嗚呼我をがり迷ふる死生今何人の身の何を
の怖し何を恨み我苟くも夢夢原わをを授け承けあま
神の御末は仕る身の我本邦の習いせある和歌敷島の通を忘
水に仲磨程の忠臣も最後は寸絲乱し辞世の歌も無のし
あゝ世の人を掛るる死後のそ念叶止まといふと差ある
房四室の有す水何に記して遺るる心愛胸襟涙め雨に
知らぬ顔ある如月の影冷きさー下昔の故國の三笠山
小渾家長き通霄詠り月の影はさる今見る月もある
中ど更なる果る身の上と思ひきつて狩衣のたの袖を引
き有りける指を喰ひ切て隔る血汁血節の思愛縁あり又

をえたるも叶字の弁を我物とせんと思ふ心なるを
先づいふもすく水くをみし川まけ文の海をみりし人
の君こそせりうたうかうも思ふるより
手を居る事は何れに
と鳴るる

も月なるに望みの月

我るは述も忙はらん

大和にておさせ九月すし

今がう述すやけり

安部仲磨
生死流傳 輪廻物語卷之二

養老禪の由來附 安部義根不義のり

却説本朝の仲磨入唐の後連年天下太平はて上下和睦の折なり
今茲養老三年丁巳三月又唐國愛春郡の農父等寧樂の都所出
百やうの我國多摩山とや所四年す樹木生茂り殊に山深く故
土地の熊たとも日々山中を尋入る木を伐り薪を採り是を唐京に仕
り者數多永何る其中の小佐伯と申者正直律義の士也其地
七十小及び父を養ひ平生孝心第一のサも逆らふ意なく今地
いにし来りて所此老父いがある過去年生の葉田や年々酒を好
今朝夕の食事の糧も酒をよりて半食を食ふ病苦頻りに身
を責る今も酒をよりて一食中の中も酒をよりて山に入り
其新を採り市に出で賣代ふし直酒をば飲りて父の老を

為せしめども固より窮民の事なり水に折み酒を全くして父の病
苦を見るに忍びず神明佛壇に祈念して暫くも怠慢なるを忌め
感ぜぬ者なりいかに然る一日山深く尋入り何となく身体疲
倦れて斧振ることも心まよあせど日西の頃頃いよいよ一束の
薪も得ず水ばかりと酒も水の難々又もや父の苦しさを助
けぬのあらざるを如何とぞと思ひつゝ歸るにせし身は
たゞ酒の白ひ鼻を穿つる如くあるに如何と其死をこれに正
しく山の半腰より流水を流る瀑布をくだりける小佐治且驚
き且怪し手中に拂ひて味ひ見れば實に天然の美酒なりける小
深く怪しと思ひあらずも父に与ふるの嬉しき顔で膝を蹴り
納め身の解れも亦て水急なりと見て我病を治しつゝ父を見
れば父の病状より這出るといふ一盃を啜り終り里や延命長壽
の美酒屋を甘酒小僧に味ひ父のおまじは扁の良薬沈黙忍り
愈む不似たりとて水に涙を流しけり小佐治も其に涙を咽び是神
明の感念あらんとそれより日毎に彼山の瀑布に参りて酒を以て父を
養ひ介抱するに近村近郷奇なりとて土地の人民集りて我れ
く此山の瀑布を以てあり見れば皆水なりなり不測の事とて
御許へ上るとして述べけり舎人親王聞召して早速参問所
に帝意を獻感あり孝行の奉るに大地感動する程の事なり
小佐治も其瑞の顯る水とて同九月下旬多摩山に御幸なり孝子
還幸の後養老元年と改元しめ斯る嘉瑞の重なるを先年
に阿部仲磨筆管内傳の一巻を乞ひ奉るに孝子
帝を蛇まきり末々の人迄も今や飯朝明や飯國と傳ふ其後便
もさぐえり大事の勅命を蒙りける身の上なる事なり
滯り及ぶる深き子細の何れと獻慮覺束を托す

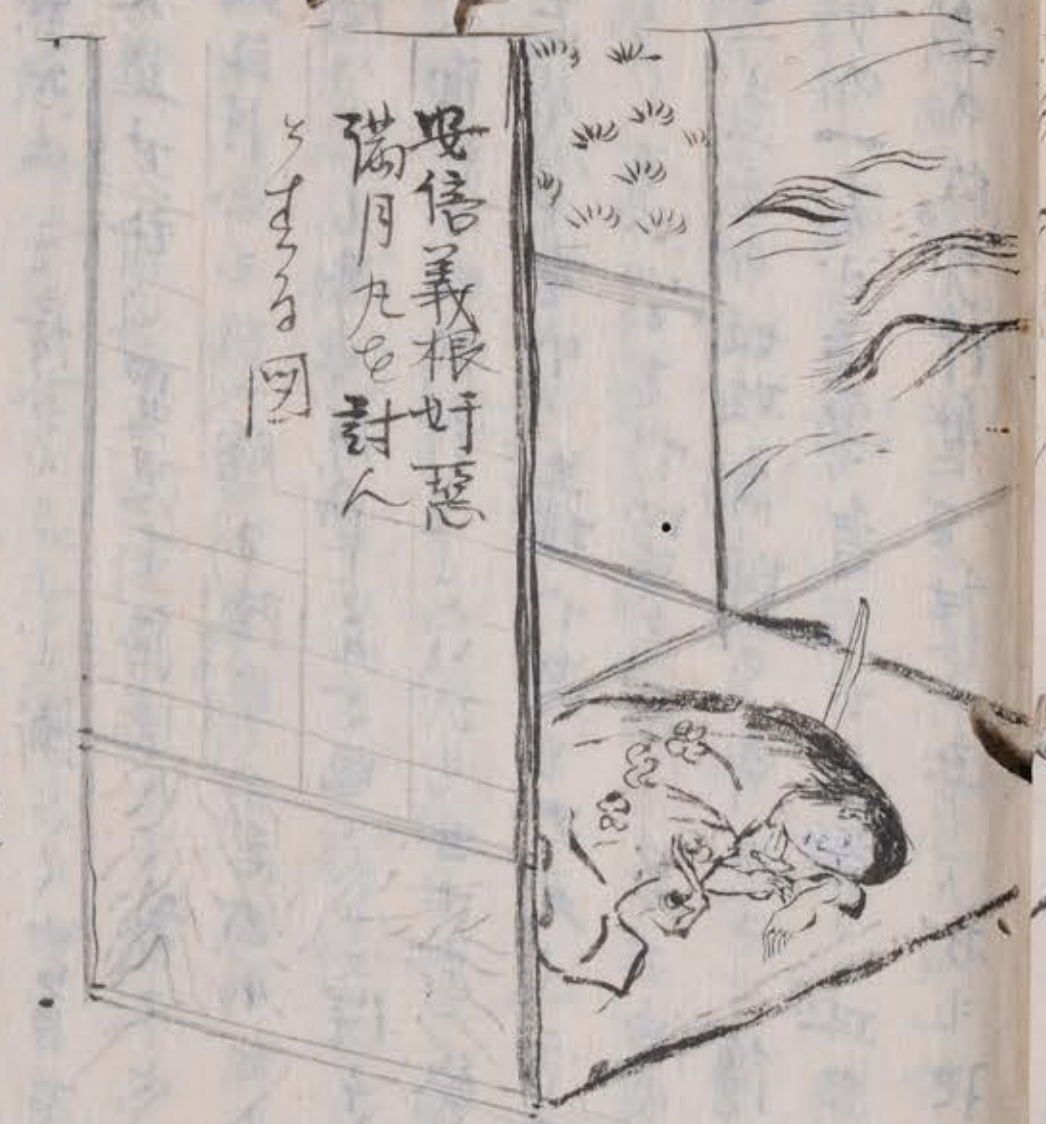
唐土昔も今も人々秀なる者必む人に愛され習ひる
仲解官の英才を心より慕ふ諷諷の官に能く時節を思ひけり
を揃ひてやされりる既に仲解唐土一着後一度の書翰を越せし
の其後絶え在りて其来已れが智恵多き事とて承る唐
土の唐土を慕ひ我日本を以て國とて感む由唐帝より御書
誂の字を漢土に仕へて有る故に再び故朝の思ひを承る唐
の官位功第を昇進し秘書監となり振振と移り左神關を
開國公たるの旨我々委細に外の便りを以て承りけり古を振ふて
やさ水けり聰明の君と申ふよりさすお世帯あり在る
類に御疑ひ起りせられ何となく大官の御沙汰宜しうなりぬ
思ふも斯る折に仲解の留守を守る兄の義根始に我身
の罪を悔ひて大抵守られが旨とて仲解に唐土留守とて

又張せしとも街説世評區々あるに好根本来の惡念起り此家
元我納むべき家あるを父船守才の仲解のをも受せられ我
家嫡子ありあがり家統くてもあらざる我遺憾かと思ひ
所詮仲解の故朝せしとの風説こそ我の開運の時節到来
の仲解が妻艶をふれに閑中手押の花と詠め満月未だ幼年
の此の免れ角もあらぬ一善又無益の義理達し我々草木に從
ひて母子年短う小殺害し心の隨に押鎖せんを詠め批判の有る
一善と煙貪邪見の惡念胸に包み面を色を食ふ事なく戯れ
口説けと鉄腕石脚負ひ心たゞ旦暮小仲解を千里の外に
えい好根の而も彌増の思ひ胸に實りて踏迷ひし恋路の關の
夜家士も己の而も静まり四更の鐘の響く頃手に一刀を授け
思ひつめける惡念四方に心奥の間の燈火細き辰風の内に
そと忍び入り揺り起し心の丈の千万無量石軟意の

次第覺悟に疾う極めと退引くらぬ一え不憚りて言葉
 ありしが稍ほ恨めしげに嫂水小隔る時午を以て指けぬ



安信義根好悪
 陽月九日討人
 する図



おも知ぬいぬるい何らじ況てや異に中嫁教戒をこゝ毎に結ハ
 ん不非道の仲ど得ぬ抑々父君の御最期までも勘え教りたり足君を
 丈仲唐親兄の礼を重じ鬼角て呼び戻したる同胞の義理

然らずや且去年勅命の重き大任を蒙りて親子夫婦の生離死別
思ひ餘る自ら宋曜はししくも恋慕とい人子非ざる御心と
或い歎き又斯くの離く気色の何れせん好根暫し待頭あり
黙然として居るう一お漸やくお首を擧げて見力の義理世間
大通其評の異見を待たして我又とくずり辨ひりる水鼓
此年月おもしひ胸の陸奥の忍ぶれど色お影をわけて物言ふと数回
問はれし事も何りううと思義に深き買力の事を思ひ伏し
人面豹心の所行ぞといひも出さず幾回も我と我身を戒め
忘ゆんとすれ生増や高も出えしを悲しさをこゝろ包めとも積
りうういつかたや四百余病の若手減れし恋の病の一症の廢
い一う一えお妓坡角鶴の奇方おし傳る夢とおもひさや無情
今の一言不良葉不愛して毒食つて血おで甜る大思心所領の敵
恋の仇お仲替を討て葉を我もにせんと思へとも千重隔て

唐國一行事とすもあらざれ同一体不便ながらも隔月を只一
刺殺し御身も害し我も又區をカ不腹却ん心得りやと計り刀の
柄小手を掛けつ眼を眼の腫も止る聲振うて云けれい流石女の胸
狭く若くや我お不怪我何りう夫一對うて言訳の有と有りぬ夜
お小角お水其悲を奈いせん一と先け場を宿めをけ別お思案
お極めんと胸を沈めて好根お向ひ誠小敷ありぬ賤まをば斯ま
思召ある仇思お思おけ程情ありもてあせし御心の序
の知らざる故や夫仲替渡唐の後絶る音信知らぬお再び
るべしとも存せむ便る方お我と母子今の仲おす遠ふあふ
見控ぬいざいさい己を愛する者のあふ客を執るとやり命
代る朝々お仕ひ芳うせ御恩を返らん必を疑ひぬお水と涙食
たる艶色い憎め西施泣る唐氏嘆き乱れくる櫻桃の花の雨中
おかなるお似う好根大に喜びて三人に人の生に存て其

あるを能く利害を辨ひて新張りし。何れも恨み人さる。同定の連理の金糸入ぬひと既して更なる。せうらんを逃る。通もあく進退此小極まりし。折もこそ何れ較曉の鐘。好根の思ひを。仰天一間隔。満月九一音高く。咳せし。母の苦惱を救ふ人。母も怕り。眩けし。休ももては。側近く好根の耳。口を寄せ。思ひの数々も憚の関を奈せん。明夜に必む三更の鐘を不問。人知れど忍び奉り。せ。秋夜に大悪無通の心も。恋の叶ひ。小。膝足廊下傳。ま歸りし。可笑けれ。斯く好根の。明る夜の深。ろを待つ。思ひ。積り思ひを。時をんと。思の外。白糸の裏。十分。肌擦り。早車。自官の体。是。いか。と。邊を見。認おき。二通の遺書も。其一通。好根の名。宛。と。し。指し。流。こ見る。ふ。妾。命を。せ。上。恋の恨を。晴。さ。れ。満月。が。事。頼。入。り。と。記。する。最。期。の。際。進。も。我。が。子。を。思。ふ。思。ふ。思。ふ。事。不。残。せ。し。心。中。を。露。不。便。と。思。い。さ。る。放。逸。無。慚。の。高。笑。ひ。初。め。く。偏。願。ある。せ。の。腸。我。其。方。ふ。恋。慕。と。云。も。実。に。け。家。を。押。領。せ。下。工。も。知。ら。む。と。此。業。ふ。記。さ。る。思。知。さ。よ。さ。わ。が。可。受。た。満。月。を。我。が。預。ら。ん。も。い。ふ。ま。れ。い。程。あ。く。足。す。追。馳。さん。記。さ。る。山。路。の。う。り。く。や。う。と。我。が。子。の。来。る。を。待。受。け。ず。と。猛。く。罵。り。云。世。の。下。より。叔。父。と。い。云。へ。ど。母。の。仇。逃。し。や。ら。ぬ。と。満。月。九。一。小。腕。ぶ。ず。ら。も。刀。勢。を。げ。く。切。拵。め。心。得。る。う。と。同。く。閃。り。と。折。き。今。世。叔。父。と。い。ふ。さ。ら。ず。者。ら。む。火。花。を。散。ら。く。切。結。び。折。し。も。数。の。う。り。が。等。叶。物。音。ふ。驚。き。て。我。も。と。駈。き。着。く。小。好。根。も。今。叶。と。烈。く。討。江。む。満。月。が。刀。の。下。を。引。外。し。撥。く。う。り。て。遠。く。飛。び。返。り。江。の。切。り。も。蹴。り。て。雪。を。霞。と。闇。紛。れ。跡。を。晦。し。逃。失。た。り。明朝。禁。徒。の。紅。明。所。一。辨。け。る。小。折。り。禁。徒。の。有。是。ありし。

時節ふれ、叔父の悲痛母の自殺皆里、仲磨が平生の
治め方よりいふに、故よりとて仲磨が叔朝正の所領を國
召上らるゝこそ思ふべきに、此陽月九、悲歎の淚断腸の思ある
に別れせし母の遺尸、一夜半の煙とあし生別れせし
を恋へど及むぬ千里の途、師等奴婢の暇遣りて先祖相傳
別れし三笠の麓春日野を後に見あて定ふべき家路、
迷ふ年、僅三十二歳のいよぶ十五ふ陽るがやと其名、
既ふ満月の満
れ、其る安部家の微運を哀れまうける、
吉備八郎 附安部山好計の事

光陰矢の如く春と過き夏と暮れ、秋の半ふより、
朝の所決善惡とも不知れされ、再び吉備大臣を以て入唐致王、
仰出され同年八月廿三日都を去るあり、
一ととの矢より津々野々通中、
唐の刻より、又嚴重に命せり、
るたれ、吉備公の館に一家
の錢別他門の見舞、宵の間の賑やまし、夜も深け人し退きて寂莫
なる座鋪の中、去脩ムいよの、
只獨りつらと遠く漢土の、
營今に便宜の何らざる、
定めて死せし、
止すなりし、
松風音冷、
出るを見れ、
蒼色にげし、
簫々ぬひ、
さよと向ひぬ、
牙、
前の遣唐使安部仲磨が、
一子陽月せや、

唐の刻より、又嚴重に命せり、
るたれ、吉備公の館に一家
の錢別他門の見舞、宵の間の賑やまし、夜も深け人し退きて寂莫
なる座鋪の中、去脩ムいよの、
只獨りつらと遠く漢土の、
營今に便宜の何らざる、
定めて死せし、
止すなりし、
松風音冷、
出るを見れ、
蒼色にげし、
簫々ぬひ、
さよと向ひぬ、
牙、
前の遣唐使安部仲磨が、
一子陽月せや、

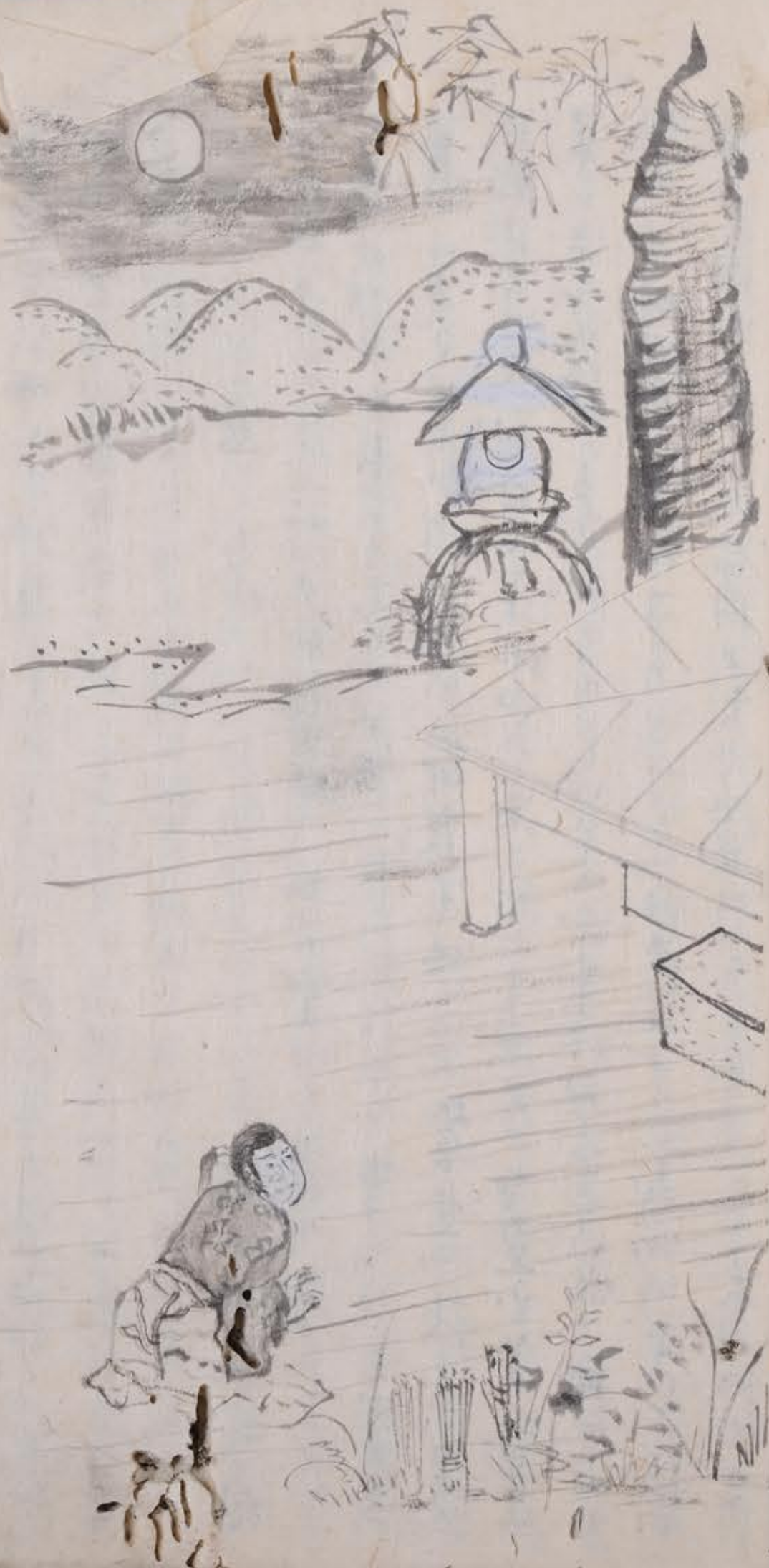
父去年の冬重き勅命を蒙りて唐に渡りある留守の閑息を
の不義に依りて負裁をまいる母の自害に昔朝庭一新し
重き御咎を蒙りて又飯朝の時までと所領庄園召上られ遂に
流浪の身となりて借す家士の情に依りて身命を繋ぎし所は
度君又勅命に依りて近日清養宮の由來に在りてひきく何
供ふ召連れられ別れに及ぶ御願の力に及ばずとも時
に形客を海より難取次人もまげられ斯くて果にいと命
代へて御泉水の質の桶より御咎をも願ひて思ひ忍び入
り誠不父の生別れ母の死に別れり世に便なき某を
憐れ不便と思召し今般入りの御供の人数に加へあいらび生々
世々の御恩顧にあらんとおもひて地を平伏して泣沈むを
備公も其不細小とれ初仲磨の賢息満月よりけりし可やけ頃
貴家の驕動も兼りて委しき事ある仰せもあく御同伴に

尊父御面致させただけれども某とも買束あり外國の御使いか
が成行するやらんと傳ふ氷を踏むの如し好それとも御同船
申さんそれと最早配符の人数分先般驛路毎宿へも中付する
遣使の事あるに遺憾あり心付ふまめやせずけ理を能
く聞し返分けられ若し書通あるもさるあり某使同不持
いし頼る尊父不親達し尚も委曲御物言を中述不目
出な御同船まで飯朝にさるる水まで幾重にも困苦を法められ
も番も有一陽の春の来るを待みとせし深し人する水
満月九の事とす斯る事もあらんと認めし一通を
遺書と封じ居せし條にの前ふは置道て初更非めある身の障
礙あるもいんと承て認めし一通惺り多き事あり
又小頃御面の其御平語にありと涙とも不願ひる水
を條に上見えひて其堂の遺書に封じ入りしに思ひ

其年、都小入子に許さむ、漸く明百年の正月、
 を許されけり、威氣揚々と参りて、去年遣使安部仲麻呂



いふが日本へ留朝せざるや、一、再び某を以て屋島に鬼舟を罷
 せしむと勅命のむすむらけり、前遣使のゆゑ、留角の



只本の望し妻細聞し召届り小不日御け休ある事
鴻巣館に留置ありし事命せられ領て運出せられける其後
禁裏に公卿大臣評議に召せられける去年の遣使を以て
からいけ度の遣使を無する事御承知されし事
其ものを平然と殺さんとも國の耻辱何れも難忍事
明らる小殺害せし事足るの計策ありと人々の心然て
錦の道より一ツの妙計あり我國聖賢の書を始め
歌舞吹彈の技藝を以て己小汝國一掃しされと
一事いふが日本に渡らせられけ度き條の場合に
小我國古來の習俗より他國の客の心を固其を
されい品を渡さるるが例ありといふ小書も
いふ其時勝負の面掛ありといふ日本えより義
あざる同にあり一命掛と云ふ水に引けいせよ

言を用ゐて蘆葦内傳を辞する不通なり
略して外に午既有一事ありと并を振ふと申されけり
三番びをわかつき奇妙の人こそは維新の玄東の時
固標の名譽これを敵手にして固せらるる也
折酔くずりも易うあると申されけり諸士一同
と云ひぬる玄東を召出されて曲や仰付られける
一むに性篤実正直にして万の事勝れて美し
はる其故は隆昌とて今年二十六才なり
其姿の嬋妍するもの万人に勝れて美し
却時の時より字向の通子とし坐あり天文地理を考へ
累年通じて未央宮に身を託し韓信の智の長を以て
大漢地におめせ間小出て遂に其身を果さる孔明の計の
嘲る誠小希有の婦人なりと夫を思ふの聲あり

如く玄東が魯領あるをも、突止み思ひせめてものゝりありと人々を
圓基の通を教へ、一既、是年、安福山密に及通の企、并、隆昌寺
の、聞知、是を、人々、ふし、軍師、みせ、やと、恋慕、こと、よせ、幾度
の、鼓、通の、艶、書を、贈り、けり、富貴、も、権柄、も、高、を、展、せ、ぬ、自、擲、は
近、り、さ、一、何、う、ふ、れ、只、惜、あ、ず、り、せ、え、方、あ、く、折、を、見、ん、せ、け、意、高、
晴、さん、と、こ、思、ひ、し、と、ど、然、る、お、げ、な、玄、東、を、皇、帝、に、火、急、の
御、召、主、何、う、や、ら、ん、と、歸、りの、塵、々、を、待、暮、し、る、誰、彼、時、玄、東、を、男
其、故、や、な、日本、より、遣、使、來、る、者、に、付、是、を、殺、さん、の、あ、り、命、掛、の、圓、基、
を、送、り、く、玄、東、に、そ、当、時、花、び、あ、り、若、年、の、旨、珍、り、蒙、開、の、達、
を、る、の、間、諺、え、て、敵、手、く、る、一、々、旨、難、有、勅、命、り、科、り、小、基、甚、の、
り、り、あ、る、日本、一、海、ら、ず、れ、四、目、殺、も、知、ら、る、と、も、が、り、三、才、の、小、段、の、
殺、れ、并、勝、人、の、手、理、あ、り、と、心、安、け、小、え、け、れ、隆、昌、寺、に、同、然、と

暫、し、さ、し、ろ、つ、む、は、が、精、何、う、て、頭、を、擧、げ、我、丈、の、高、き、を、露、聞、
み、達、して、大、切、の、御、用、を、集、け、る、身、の、面目、と、い、ひ、あ、ず、り、命、掛、の、
勝負、と、い、せ、小、類、あ、る、大、事、こ、小、敵、と、見、て、侮、る、一、う、む、と、い、兵、書、の、教、へ、
珠、子、日本、小、国、と、い、申、せ、と、も、神、力、加、護、の、國、と、い、れ、ば、何、あ、る、神、愛、不、則、を、
以、て、本、國、の、人、を、守、り、と、い、ふ、者、も、我、丈、一、月、あ、る、も、渠、ず、あ、り、負、ぬ、い、
意、を、命、を、失、ひ、ぬ、ん、斯、る、大、事、を、聞、く、う、う、思、近、教、ひ、通、ら、せ、ぬ、
極、秘、を、殘、ら、ず、傳、授、せ、ぬ、高、も、先、祖、の、宗、廟、を、祈、り、何、卒、有、尼、其、勝、つ、
一、手、極、心、し、と、思、ふ、あ、ひ、と、假、令、勝、り、と、も、人、を、殺、す、の、あ、る、事、を、定、て、
是、も、安、福、山、楊、圓、忠、の、侍、人、が、勝、じ、ん、せ、し、る、と、い、ふ、人、を、い、ふ、と、い、ふ、
る、あ、り、何、極、心、も、疎、忽、す、し、斯、る、迷、惑、を、為、す、と、い、ふ、と、同、を、流、し、て、
言、ひ、け、れ、ば、玄、東、初、め、し、心、づ、き、後、悔、を、ぬ、く、も、今、い、せん、と、い、ふ、只、此、上、に、圓、
基、の、極、秘、殘、り、所、あ、く、傳、一、傳、て、好、む、所、に、非、ず、ぬ、と、も、晴、の、勝負、が、
歩、勝、て、あ、る、の、肩、同、あ、せん、もの、と、師、力、の、礼、や、ら、夫、妻、の、勝、つ、負、の、

閑坐相携りて人知れむこゝ入あける

仲蔵も大に驚いた

附

先備けりて、國其名の通を懐る

却説先降大臣、今日禁廷を退出し、鴻臚館にありし、不承て下
知や、何り、つうけん、舊態の官人、心海の珍味を以て馳走奔走、大方、さ
上と下と、動搖め、さし、已に、刻限も成り、けれ、頼て、人々、暇を
夜も深々と更闌し、先備公、只一人、眠らん、と、それと、
夜更の夢の覺め、易く、四更を、さぐる、遠寺の鐘、いとい、無常を、観
つ、仲蔵の、生に存て、今、ふた右の、知れざる、我身、上の、行末、
い、成行、やらん、と思ふ、抗、燈臺の、傍に、誰と、知ら、人、有て
恨を、訴ふる、如く、それ、先備公、が、起り、抑、何、ある、もの、を、身
不肖、より、某、日本、の、神、の、御、末、の、重、を、命、を、蒙、りて、遠く、異
國、の、土、に、着、け、如、く、妖怪、を、駭、く、もの、有、り、其、所、早く、去、れ
さ、かく、目、不、物、と、せん、と、已、御、佩、刀、手、を、掛け、ぬ、ひ、彼、者、の、心、を、
を、揚、げ、や、を、れ、先備公、を、や、り、ぬ、ひ、と、我、も、と、妖怪、變化、を、何、ら、を
是、見、て、不、審、晴、ら、す、れ、ど、何、の、詔、ぞ、し、妖怪、の、其、片、袖、を、さ、る、
い、先備公、の、心、を、怪、し、ま、り、手、不、受、て、見、ぬ、ひ、さ、い、る、も、如何、不、血、汐、を、
以、て、天、の、糸、より、さ、き、見、ぬ、ひ、春、日、ある、と、言、ふ、山、子、出、で、し、月、や、も、い
こ、い、み、し、く、書、つ、る、い、紛、ふ、う、と、ある、仲蔵、の、手、跡、を、一、神、て、臣、の、形
容、を、見、ぬ、顔、色、青、ぞ、め、瘦、れ、て、昔、の、替、り、面、影、の、腫、れ、を、
頬、骨、高、く、聳、在、右、左、一、生、死、を、疑、ひ、ある、安、部、仲蔵、も、有、
い、先備公、大、に、驚、き、ぬ、ひ、初、我、推、量、の、如、く、已、に、世、に、ある、人、と、い、成、れ
い、思、ひ、を、述、べ、ん、便、も、ふ、く、我、事、り、を、夢、ひ、か、假、の、姿、を、見、ぬ、ひ、
子、細、を、言、ふ、人、の、為、ある、一、し、疾、く、い、ひ、ぬ、ひ、泣、き、ぬ、ひ、聞、れ、て、仲蔵、
涙、を、咽、び、さ、ぬ、い、片、物、後、も、憶、う、や、某、渡、渡、の、勘、定、を、蒙、り、し、其、日
より、兼、て、師、の、ある、もの、と、慢、懷、し、が、り、思、ひ、き、や、倭、人、も、安、部、山、が
奸、計、を、墮、入、り、雪、を、流、さ、げ、る、高、岡、の、露、の、命、を、終、へ、ん、と、い、さ、い、ぬ、ひ、

6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7

るところ金鳥玉史を渡さしめて何らん其時死する者妙の道は
とても死する者通るなり只（一）潔く命を捨て泉下の人とする人の
といふ者なり是非もあや足下といひ某は西度の勅使更甲斐なく
皆好計を身を果さば命惜むべし然れども國の恥辱を奈せんといふ
を切しめてやされければ仲睦遠く進みよると思ひなり
れど我々素直を以て足下を護念し是れ勝利を得る間也
も心をせしめおふか明日禁座に於て國其の敵を撃つべし
人の官人其東にて當時は名高き其仙之然るははふ事隆昌といふ
又一席の名人故明日の勝負は儼然何りば丈夫其東の身の大幸と
今夜密に其名の極意を傳授するこそ幸なり我々足下を伴ふて
彼を圍撃す誘引せし足下日頃の才智を以て能く國其の道理を悟り
明日の勝負は勝るなり我又足下の影身添ひて其東を以て助言せし
如何なる名譽の敵もほれ負くるといふの何れ一なりといふ

頼母く云ければ其備太カをえ願て仲睦を伴われ其東の家を
指して飛ぶ如く馳行ける此時隆昌は一面の石黒白の石を分
て其東に向ひしける抑其名の聲觸る古往其東の治せし太子丹朱
とやせし性愚なりして天下を治むべき器量ありきと思ひ
され初め御意を練らんぬ小園其名を設けて國家の道で教ふ
はされ其名馬の長一尺二寸あり十二月を長し縦横三百六十日一
年の日數を黒白日月のまゝなる圓なる石の上を擲く陽は
天を象じうなる其馬下は靜なる地を象じる天地世界
の中生死を以て一大事とするの故なり延る渡る切外押
の言に戰慄を形どる軍の法なり如此理尽くしうとて其馬
を東に白子ととりせ隆昌は黒子ととりて二ツ二ツしける隆
昌は三ツ目をしける黒子二ツ破れしや一太は其馬を以て其東に向
ひ今三ツ目の陽數ありて黒子の陰體破るる最期なり

其故日本國なりと雖も我邦より東へ何うて陽國なり我國大國なり
日本より西へあるて陽國なりされい今陽のにお陰破るの兆は良人
の身の上の大事子迫り且又いとも怪しき今夜夫婦の外人もあ
る盤上自然と死えうて物の障礙をあらうとす弥以て覺束る
れい明日ハ必々余所あらう助えのう願ふく今夜ハ先づ是は陽の
おと流石の氣味である其をすやして休みう此時にも是は陽
の仲腹と其の盤面を弄りうて御座せし間さう小勝る陰謀を前
にすうの言葉の端々見定められて一大事と鴻芦館の客向を
すでに酌らんとせし折しも早夜小細音く腰の鐘が響き覺えて
見れに曉月僅く西窓を照らし燈籠えり幽小隙隙と煙のけ
鴻芦館の客の曙に一炊の夢をうけんと己小消へんとする燈火を
挑げんとしと起るに何の間にも枕邊に將衣の序神ありて
天の尔の點迄認めらる夢を見りふやしもまだ己を初め

旅愛を探りし小却て満月の書簡ありされは古脩公深し心子
感ず夢といひて正夢あり仲腹既小にさると雖も神是赫々
我を叩くる不疑いあり思ふに夢を思ふに殊にいづる我國
小間もむむ如國基の通自然と妙なるが如く斯く勝利
いふの何うし思ふ皆仲腹の賜ありと頼り盤より嗽そぞ
音を聴き水を捧げて醒小仲腹の夢をなす朝はありの沙汰
今や醒しと待たけられとぞ面々しけれ

安部仲磨
夢見伝
輪廻物語
卷之二

一小説不安陪仲慶之遺角伏小あひり
所居せんしきふ小待や賦し送る人何其詞

日本昆郷詩常都
征帆一片遠蓬壺
明月不還沈碧海
空雲初色滿蒼梧

仲慶之云廣く天の原云々一歌
作りし云々老る為に移す

明治十五年壬午歲文月寫之

清太郎寫



